■土肥いつきさん

人権センター通信№３８掲載「性の多様性から『じぶん』について向き合ってきたふたり（田中一歩さん・近藤孝子さん）のはなし」の中に登場した土肥いつきさんは、2010年10月1日に開催した人権センター公開講座において、「ありのままの私を生きる」ために～「隠す」社会から「語れる」社会へ～という演題で講演をしていただきました。

そのときの講演内容を紹介します。

〈講演をするにあたって〉

性的少数者について考えることは、単に「少数の人々の問題を知る」ということにとどまるものではありません。そこには私たち一人ひとりが、自分自身をどう見つめ、どう生きていくのかという問いの答えが隠されています。「ありのままのわたしを生きる」ための手がかりを「セクシュアリティ」という側面から一緒に考えていければと思います。

〈幼いころ～高校生〉

私は、ある頃から出生時に割り当てられた性（男性）に違和感を持っていました。小学校中学年頃からは、「女性の服を着てみたい」、「女性の体ってどんなだろう」、「おっぱいを自分の体にもくっつけたい」と思うようになりましたが、そのことは誰にも言うことはできませんでした。でも、心の中に秘密をしまうための小さな箱を持ち、その箱に蓋をして過ごすことで心の安定を保ってきたので、苦しいとは思っていませんでした。

高校生になり、合唱部に入りました。そこで、かわいらしい女の子に出会いました。「めっちゃかわいいな。好きやなあ」という気持ちが芽生えました。でもその気持ちは「あんな風になりたいな」へ変わり、「でも私にはなれないな」から「ずるいやん（嫉妬心）」へと変わっていきました。だから、その子に感じた気持ちはやっぱり「好き」とは違うものだと思いました。

〈京都の公立高校の教員になって〉

その後、公立高校の数学の教員になりました。学校では人権教育に取り組んでいく中で、被差別部落出身の子や在日韓国人の子、家庭の中に自分の居場所がないと感じている子など、さまざまな子どもとの出会いがありました。その子たちが悩み苦しみながらも、自分の立場やつらいことを友だちに語る姿や、そのことを受け止める周りの子どもに出会えたことは幸せなことでした。ただ、自分のことを語れない子もたくさんいました。その時に「なんで言えへんの」と言えない自分がいました。それは、私がそれまで子どもに自分の恥ずかしい失敗談などをたくさん話しても、私の心の中の箱にしまっていることは話すことができなかったからだと思います。

〈トランスジェンダーという言葉との出会い〉

ある時、教職員で「同性愛」をテーマに据えた劇をつくることになりました。その時に、10年間同じ職場にいた同僚から同性愛者であるとカミングアウトを受けました。

彼から紹介された本の中で、初めて「トランスジェンダー」という言葉と出会いました。それまでは、自分は変態なのだろうかと思ったこともありましたが、その本を読んで自分のような人は世の中にたくさんいるのだと分かりました。その時に、私は心の中の箱の蓋が開くのを感じました。心の中の箱は、情報に触れると開くといわれます。その後、トランスジェンダーの仲間との出会いもあって、ありのままの自分のことを家族や同僚にも語るようになりました。

〈自然は多様性を好む〉

　統計では同性愛者の人は１０％で、トランスジェンダーの人は５％いるのではないかといわれています。１００人いたら１５人です。私はその人たちに対して、いてくれてありがとうという気持ちを持っています。なぜなら、１５人の人たちがいる方が多様性のある社会だと思うからです。なぜ、そんなに多様な人が生まれてくるのだろうという疑問がわく人もいるかもしれません。そのことについて私の好きな言葉を紹介します。ハワイ大学のミルトン・ダイヤモンドさんの言葉です。「自然は多様性を好む」という言葉です。その後に「しかし、社会はそれを嫌う」と続きます。私たちはいつの間にか、社会のあたりまえとされる固定観念に縛られていることはないでしょうか。